

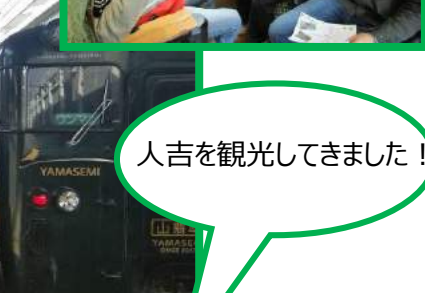
3班 レクリエーション写真集



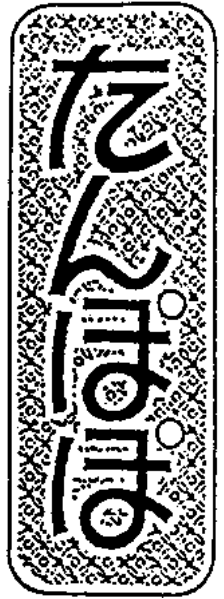
特急かわせみやませみに乗車！



車中で駅弁を。



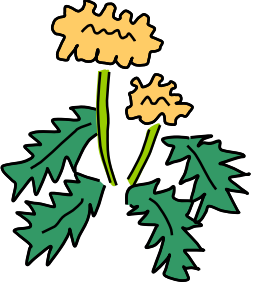
人吉を観光してきました！



No. 380
 H31年3月1日
 一 発行 一
 〒869-1217
 熊本県菊池郡
 大津町森 54-2
 社会福祉法人
 三気の会
 三気の里
 ☎096-293-8100

2班

ホテルオークラでのんびりランチ！



日帰りで福岡にGO！

マリンワールドでイルカショー！





3月



1班：「当たり前に感謝」

1月、2月はインフルエンザが猛威を振るいました。そんな中でも、作業が毎日あることで元気な利用者の方はいつも通りの生活が送れたことに感謝でした。罹患されていた方もすぐに回復され作業に復帰されました。静養明けでもしっかり作業され、久しぶりの作業は皆さんとても意欲的でした。作業のスピードが落ちることがない皆さんを見て、とても頼もしく思えた月になったと同時に、スタッフも体調を崩している場合ではない！と自分自身を奮い立たせ、皆さんの作業ペースに負けないよう頑張りました。毎日作業を頂けること、毎日みんなで作業をすることという当たり前に感謝しながら、また、レクリエーションや毎月の給料外出などの楽しみに向かって、今日も元気に1班は頑張っています！

支援員 重岡 瑞希



2班：「支え合う事」

寒い日が続きますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？2班の皆さんは寒さに負けず！と言いたい所ですが、体調を崩される方もおられました。数名の方が体調を崩されたため、いつもペアで作業している相手やその一工程をする方がいない…という状況になる事がありました。そんなピンチな状況を理解され、「Oさんの分まで頑張ります。」と言われる方や何も言わずにサッとペアの方の工程に取り組む方など、自然とカバーし合う様子が見られていました。そして、回復して来られた際には「おかえり。」という声かけも聞こえてきて、大変な中でしたが2班メンバーの絆を感じられた期間でした。

支援員 下城 悠香



3班：「挑戦」

いつもはトマトパックにシールを貼る作業に取り組んで頂いている、Aさんの話です。

シール貼りの戦力であるため、いつもこの作業をお願いしていました。しかし、ある日「野菜の作業をしたい」とのことで、玉ねぎを袋に詰める作業に挑戦されました。この玉ねぎを袋に詰める作業は、決まりがいくつかあり、難易度は高めの作業です。そのため、初めは袋が破れたり玉ねぎが上手く並べられなかったりと苦戦されているようでした。しかし、表情は「できるようになりたい」と真剣そのものでした。何度もスタッフの動きを模倣して、ついに出来るようになったAさん。今では、袋を機械で閉じる作業も、進んで取り組まれています。何にでも興味を持たれるAさん。そして、出来るようになるまで諦めないAさん。そんな、Aさんの姿は「挑戦」することに躊躇してしまいそうな私の背中をいつも押して下さっています。

支援員 元杉 朋世






4 班：「最近の 4 班」

1 月から 2 月にかけてインフルエンザが猛威を振るいました。利用者の方にもマスクを着用してもらい、お互いに注意喚起しながら予防に努めました。罹患者ゼロと言いたところですが、4 班ではスタッフ 2 名、利用者さん 1 名が罹患してしまいました。感染予防のために個別外出や給料外出が中止になってしまい、利用者の方にはとても淋しい思いをさせてしまう月でもありました。その後、スタッフ、利用者さん共に順調に回復し、1 週間もせず活動に合流することができました。その際、「久しぶり!」「元気ね!」「おらん間に〇〇があったよ」など、声を掛け合っており、4 班の温かさを改めて感じる機会となりました。

現在、三気の里は落ち着きをみせましたが、まだまだ油断禁物です。集団生活だからこそ、みんなで予防に努めたいと思います。


支援員 田上 佳奈



5 班：「インフルエンザ」

2 年程前の悪夢がよみがえりそうな程、1 月はインフルエンザが流行しました。熱がなくても、インフルエンザ陽性反応が出る事があったそうです。幸い、私にかかる事なく、皆さんが静養される中、元気な皆さんと一緒に過ごしました。今回のインフルエンザは、菌を持っていても発症するかしないかの差だったように思います。発症しなくてよかった…と思いつつも、感染が拡大してしまい、マスクや手洗い、うがいをしていても十分に予防するのは困難であったように感じます。バイタルチェックはもちろんの事、咳、くしゃみをしていないか等、細やかに見ることで体調の変化が見えてきます。インフルエンザの時期は 1 日に何度も検温を行いますが、朝は熱がなくても、お昼から発熱しているケースも多く、いつも以上に体調に気を付けていても感染力の方が勝り、拡大し…集団生活の難しさを改めて感じさせられた 1 ヶ月でした。

支援員 宮岡 春菜




「就労継続支援 B 型を始めるにあたって」

遠い昔、「障がいがある方が働くなんで…」と言われていた時代から、「障がいがあっても働く」時代を経て、障がいは「環境によって（社会モデル）作り出される」、「個性や特性を活かしていこう」といった認識が現在広がっています。

先日、作業開拓のためある企業の方に時間を頂きました。作業を頂く立場として、交渉を進めましたが、その企業の方が一言『「あげる、もらう」といった立場ではなく、これからは一緒に作る（働くフィールド、地域など）ことを考えていきましょう』であった。ILO が提案しているディーセントワーク「働きがいのある人間らしい仕事」。これは私たちの仕事にも通じ、支援をする中で「障がいがある方のディーセントワーク」を常に考えていかなければならない。「利用者さんの可能性や努力、能力を知っているのは、私たちだ」と自信を持って、地域の企業とパートナーとして働けるよう努力していきます。

支援員 今池 一成



「これからの支援の話をしよう」

主任 佐藤 和也

自閉症という障がいが世に知られてから、障がいの原因は母親の愛情不足という専門家の言葉や、〇〇療法が有効だという言葉に、自閉症の子を持つ多くの親が翻弄された歴史があると聞いている。それから自閉症の研究が進み、原因は親の愛情不足や育て方が問題ではなく、脳機能に原因があることがわかった。しかし、それでも自閉症の全容、脳の全容を掴むまでには至っておらず、新しい情報が随時更新されている。

三気の里は自閉症支援の専門施設として設立され31年になるが、その間も自閉症は△△だから〇〇、△△療法は〇〇だから、と賛否含め人によっていろいろな受け取り方や感じ方が違うことがわかった。時には、「その考え方はおかしい」、「こっちの支援の方が正しい」等の口論になることもあり、同じ職場内でも対

立とまではいかないものの、険悪な雰囲気になることもあった。しかし、よく考えれば自閉症どころか「人」そのものの全てを知っている人は存在するのかもしれないことである。化学が発展し確かにわかるようになったことも多いが、それでも「人」が人の最大の研究題材であることは今も変わらない。その中で、対象が「人」である以上、この考え方、この捉え方が正しいと本当に言えるのかということである。かつては専門家ですら、自閉症の原因は親の育て方と語っていた時代があるということだ。

支援においても同様のことが言える。自閉症の中核的な症状に「社会的コミュニケーション」の難しさがあるが、問題となる程度は置いといて、対人関係に全く悩みがない人は存在しないのではないかと思う。親、兄弟、子、夫婦、恋人、友達、先生、上司、部下、自分の周りに存在する関わりのある人と常に良好な関

係を保っている人はまずいないのではないか。自分の周りにいる誰かとの関係に大なり小なり、何らかの悩みを抱えているのではないか。それだけ人と人が関わるということが難しいのである。その大きな要因は人の多様性と、人が人を理解できない現実があるということだと個人的に思っている。どれだけ他者理解に努めてもそれは理解したつもりであり、その中には一定の正解と一定の間違いがある。理解度によってその比率が変わるだけであり、100%他者を理解することはできない。

障がい理解、他者理解が大事という福祉の世界においてその言葉がどれだけ影響を与えるか理解しているつもりであるが、その事実から目を反らしてしまうと自分の考え方や支援が間違っていないかと思込んでしまう恐れがある。人についても、障がいについても、支援についても有効な情報は一握りである。今後、解明されていくことが増えるに

つれ、今までは正解と言われていたことも間違いになる可能性はゼロではない。また、人の中にもいろいろな性格や特性があり、障がいの程度も異なると、その数に應じた考え方や、支援が必要となってくる。さらに人は時と場合と状況で変化していくとなると必要となる引き出しはほぼ無限ではないかと思う。個人的な見解も多く、批判も多いかもしれないが、自分が間違っていないと思いつまず、学び続け、その人の理解も支援も最適解となるよう努めていきたい。利用者の生きやすさや幸福を望む気持ちはどの支援者、関係者も同じだと思う。私自身もそうであるが、自分と異なる考え方等に批判的になりがちであるが、批判的になることなくお互いが高め合うことができればと願います。



【家族便り】

牛島 智子

先日面談させていただいた際に久しぶりに弟の小さかった頃のことをいろいろ思い出す機会がありました。

小さい頃は目を離すとすぐいなくなり、慌てて家族で探し回るといったことは度々で親は大変だったと思いますが、私にとっては本当にかわいい自慢の弟でよく公園にも一緒に遊びに連れ行っていました。

2人で一緒に遊んでいると近所の子から心ない言葉を浴びせられることもありました。親も心配するほど引っ込み思案な私でしたが、何も悪いことをしていないのに言われっぱなしでは弟も可哀想だと思い、ちゃんと言い返せるような度胸も付きました。

親は弟のせいで私に色々不自由をかけてしまっているかと心配していましたが、私にとっては普通では経験できないことや弟のおか

げで知り合えた人達もあり感謝しかありません。

今三気の里でお世話になり、何から何まで皆さんにお世話になりっぱなしで心苦しい部分もありますが、弟も大変落ち着いて生活できており、皆様には健康管理から入所者皆さんの特徴や接し方等細かい所までご支援頂き、頭の下がる思いで本当に感謝しかありません。

以前、私も福祉の仕事に就きたいと思っていた時期がありました。が、あまり勉強をしなかったため夢で終わっておりませんが、今の仕事を退職し、いつか少しでも三気や皆さんのお手伝いだけでも出来る日が訪れればと思います。その際にはお役に立てないかもしれませんが、宜しくお願い致します。

いつも本当にありがとうございます。今後とも宜しくお願い致します。



【相談支援事業所たんぽぽ】

「親もと離れ頑張るあなたへ」

相談支援専門員 野口公美

つらい時期があったと思います。親もと離れ多くの事を学んだことだと思えます。「前のようにはならない」と頼もしいことも言ってくれます。黙々と任せられた仕事

を頑張っています。周囲の人への心配りが上手だと言われています。元々優しい心をもっていますもの。自分のことを表現できるようにになりました。字が読めるようになりたいとの学びの気持ちが出ています。買いたい物に自転車で出かけたり、地域の方と顔なじみになり、声を掛けてくださったりと・・・。素敵な暮らしをしていると思います。

あなたの事を丸ごと受け入れてくださった方々のおかげです。いつも遠くで心配している両親のおかげです。若い君は未来に向かって一歩ずつ階段を昇っていくことでしょう。

